

『実例詳解古典文法総覧』補遺稿

連載第3回 第2.5.2節～第2.6.1節

2018年2月1日

小田 勝

この連載の話をいただいて、とりあえず6回分の原稿を書いたのだが、今、公開された2回分を見直すと、色々と書き忘れていたことに気がついた。そこで、今回は、今までの2回分の補足から始めたい。

まず、「2.2.2 接辞付加による活用」。古代語の下一段活用の動詞は「蹴る」1語とされるが、ほかに下一段かと疑われる動詞に「うせる(甞)」(獸が鼻で物を動かす、の意。「甞…宇世流、以鼻動物也」和名抄・十卷本7)という語があるから、一応記しておく(『日本国語大辞典[第2版]』「うせる」の項を参照)。

連載第1回で新設した「2.2.7 活用形の限られる動詞」に、「口舌つ」「拒む」(以上、連用形しか例をみない)、「慰もる」(連体形しか例をみない)を追加する。「連る」や「訛む」などは、恐らく終止形の用例はないだろう(「如く」も終止法はなさそうだが、「何かこれに如くべし」(太平記12・天正本)のような例がある)。用例が少なく、特定の活用形しかみることのできない動詞は、当然、活用型の特定が困難になる。例えば、「ほどなく寝入りてくづち臥せり」(落窪)の「甞つ」、「吟 シナケル 忍泣也」(色葉字類抄)などは、活用型が不明である。

この節の次に更に「2.2.7 活用型にゆれのある動詞」の節を立てよう。例えば「綻ぶ」(上二段)、「理もる」(下二段)はごくまれに四段の語形がみえ(「千種にもほころぶ花の」順集、「うづもることの」古今六帖)、「あひしらふ」(四段)はごくまれに下二段の語形がみえる(「昔のやうにもあひしらへ聞こえ給はず」源・潯標)。

「2.3.3 撥音便」の40頁の一番下の◆は、撥音便の無表記によって、存続の助動詞「り」が、表記上、消えてしまうという話。このような場合、無表記の「り」は索引で検索できるだろうか。例えば、『源氏物語絵巻詞書』(宿木二-21)に、

・[装束ナドヲ] 引き違へ心得ぬまでぞ好みそし(=趣向ヲ凝ラシ過ギ) 給へめる。
という例があつて、これは「給へんめる」と読むべきものと思うが、索引(汲古書院版)で「り」を引いても検索されない。同様の問題は、21頁「1.9 音の縮約」にあげた諸例でも起こり得よう。「我が父母ありとし思へば、かへらや」(土佐)は「帰らむや」

の約とも転ともいわれ、「かく恋すらば [古非須良波]」(万 4082) は「恋すらむは」の約かともいわれる。

41 頁「2.4 動詞の自他」では、次のような例を追加する。下線部は「私を生かす人=私を死なせてくれない人」の意で、道綱などを指す。

- ・いで、なほここながら死なむと思へど、生くる人ぞいとつらきや。(蜻蛉)

半井本『保元物語』(新大系 63 頁) に、

- ・腰の骨射切れとひやうど放ちたりければ、長鳴りして御所中を響け [ヒビケ]

という語形があって、新大系の脚注 55 に「カ行下一段活用の動詞「ヒビ(響)ケル」の連用形。響き渡り。」と説明するが、「下一段活用」とするのは不適切ではなかろうか(自動詞という理解も)。仮にこの本文のままで解するなら、自動詞四段に対する下二段の他動詞形とするほかないだろう(ただし「響く」の下二段は『日本国語大辞典[第2版]』には立項がない)。

44 頁の 3 つ目の◆の類例をあげる(佐伯梅友 1932)。

- ・武蔵嶺^{むさしね}の小峰見隠し忘れ行く君が名かけて我を音し泣くる[奈久流](万 3362 或本歌)
連載第 2 回で新設した「2.4.5 他動詞の再帰的用法」。次例も、「[自分自身を]居籠む」の意だろう。

- ・ゐこめたりつる人も、皆くづれ出づるほどにまぎれて(大鏡)

「白き波を寄す」(土佐)のように、自然現象ではこのような表現は多い(木下正俊 1959)。この節の次に、青木博史(2006)によって、「2.4.6 原因主語他動詞文」の節も立てる必要があった。

連載の続きに戻る。49 頁「2.5.2 意志的他動詞と自然的他動詞」。現代語の「失う」は一般に自然的他動詞であるが、古代語の「失ふ」は意志的にも自然的にも用いられる。

- ・漢の高祖は…淮南の黥布を失ひし(=亡ボシタ)とき(保元・金刀比羅本)
- ・白妙の我が下衣失はず持てれ我が背子直に逢ふまでに(万 3751)

次例の「命を失ふ者」は、「為朝が手にかけて命を奪う者」の意である。

- ・[為朝ハ] あだ矢一つもなかりけり。そのほか手にかけて命を失ふ者数を知らず。
(保元・金刀比羅本)

この節の次に、柳田征司(1994)によって下記の節を新設し、116 頁用例(9)の下の「なお」以下をこちらに移動・統合する。なお、99 頁の用例(7)(8)にも下記と同様の記述

がある。

2.5.3 意志動詞の無意志的用法(新設)

現代語の「服を濡らした」「財布を落とした」のように、意志動詞を「不本意ながらそうなった」という無意志的な意味で用いることがある(柳田征司 1994 参照)。

- (1) 我がやどの^{ひとむらばぎ}一群萩を思ふ児に見せずほとほと散らしつるかも(万 1565)
 - (2) 白散を、ある者、夜の間とて、船屋形にさしはさめりければ、風に吹きならせて、海に入れて、え飲まずなりぬ。(土佐)
 - (3) 目の前に[娘ヲ] 亡くなしたらむ悲しさはいみじうとも(源・蜻蛉)
 - (4) 二十三にて弟を先立てしかば(十訓抄 2-4)
 - (5) ^{たちやま}立山の雪し消らしも[水量ガ増シテ] ^{はひつき}延槻の川の渡り瀬 ^{あぶみ}鐙漬かすも(万 4024)
-

50 頁最初の◆の例、「松」は「待つ」との掛詞で、「よろづ世を」が「松=待つ」に係るとすれば、「～を～に～を」の例にはならない(英語の bet の句型(2つの目的語に加え that 節をもとる)が念頭にあった)。同頁「2.6.1 同族目的語」、用例(1)は陳腐な例だから、すこしひねった例を追加する。

- ・ほととぎす一声鳴きていぬる夜はいかでか人の眠をやすく寝(新古今 195)
- ・[出家ヲ] 思ひ立つに、はたいつの眠かは寝られける(四条宮主殿集・詞書)

次例は、51 頁用例(14)の類例。

- ・宇治にて、水に浮きたる橋に、うたた寝に寝たるに(実方集・詞書)

[出典追加] 源氏物語絵巻詞書②院政期③『源氏物語絵巻詞書総索引』／四条宮主^{とのも}殿集①主殿(生没年未詳、四条宮寛子(1036-1127)に仕えた女房)③新編国歌大観 7

[引用文献追加] 青木博史 2006「原因主語他動詞文の歴史」『筑紫語学論叢Ⅱ』／木下正俊 1959「雨が降る」といふ言ひ方『国文学』(関西大学) 25／佐伯梅友 1932「万葉集「泣く」「泣くる」考」『国語国文』2-10／柳田征司 1994「意志動詞の無意志的用法—あわせて使役表現のいわゆる許容・放任・随順用法について—」『国語学論究⑤中世語の研究』